



秋の平林寺境内林（天然記念物指定）



「妙音沢」（新座市）の湧水



國木田獨歩像

「木々と語る日」

峯田義郎作品 新座市中央図書館前で

名作「武蔵野」を書いた 國木田獨歩

國木田獨歩は、明治四年（1871）、千葉県銚子の母の家で生まれた。幼名は龜吉、その後いくつもの名前に改められたが、後年は主として獨歩を筆名とした。

父は國木田貞臣、通称専八といい、播磨龍野藩、脇崎氏譜代の家臣。藩船で江戸に向う途中暴風に会い、銚子沖で遭難、救助されて旅館に静養中、旅館の手伝いであつた淡路まんと知り合つたとする説が有力である。

父にはすでに妻子があり、母も既婚だつた。龜吉は銚子で育てられたが、明治七年、父専八が故郷に家族を残して単身上京、下谷の脇坂旧藩邸内に母まんと彼を呼んで家を構えた。明治九年のこと、このとき四才だつた。

司法省に出仕していた専八は、明治九年、山口県山口裁判所に転任、次いで萩臨時裁判所の書記となつた。さらに広島、岩国に転勤、龜吉はここで小学校初等科を終了したが、専八が山口治安裁判所に転任したため、明治十六年（1883）、彼が十三才の折り、山口今道小学校に転校、成績優秀で、教師から注目された。父専八は司法官制度の改革、また龜吉は山口中学校の学制改革などの影響を受け、退学。しかし父の許しを得て単身上京、東京

専門学校英語普通科（早稲田大学の前身）に入学、牛込区早稲田町に転居、ときは明治十九年、彼は十六才になつてゐた。

明治維新に強い興味を持ち、学生運動にも加わつたが、徳富蘇峰と知り合つて影響を受け、一転して文学の道を目指した。小説、詩、評論などを発表、明治二十三年頃から教会に通うようになり、またワーズワースやツルゲーネフなど、自然主義の文学に傾倒した。明治二十四年（1891）、麹町一番町教会で洗礼を受けた。

その後渋谷村（現東京都渋谷区）に住み作家活動に専念、明治二十九年（1896）、田山花袋、柳田国男らを知り、「独歩吟」を『国民之友』に発表。さらに花袋、国男、独歩の詩を取めた『抒情詩』を刊行した。

二葉亭四迷の訳「あひゞき」に影響され、「武蔵野」を発表、浪漫派作家としての地位を確立した。

明治四十一年（1908）肺結核にかかり、神奈川県茅ヶ崎の結核療養所で療養生活を送る。病状は悪化して、同年6月23日、三十八歳で死去。

武蔵野

國木田獨歩

「武蔵野の俤は今わずかに入間郡に残れり」と自分は文政年間にできた地図で見たことがある。そしてその地図に入間郡「小手指原久米川は古戦場なり太平記元弘三年五月十一日源平小手指原にて戦うこと一日がうちに三十余たび日暮れは平家三里退きて久米川に陣を取る明れば源氏久米川の陣へ押寄せると載せたるはこのあたりなるべし」と書きこんであるのを読んだことがある。自分は武蔵野の跡のわずかに残っている処とは定めてこの古戦場あたりではあるまいかと思つて、一度行つてみるつもりでいてまだ行かないが実際は今もやはりそのとおりであろうかと危ぶんでいる。ともかく、画や歌でばかり想像している武蔵野をその俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ひではあるまい。それほどの武蔵野が今ははたしていかがであるか、自分は詳わしくこの間に答えて自分を満足させたいとの望みを起こしたことはじつに一年前の事であつて、今はますますこの望みが大きくなつてきた。

さてこの望みがはたして自分の力で達せらるるであろうか。自分ではできないとはいわぬ。容易でないと信じている、それだけ自分は今の武蔵野に興味を感じている。たぶん同感の人もすくなからぬことと思う。

それで今、すこしく端緒をここに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じたところを書いて自分の望みの一少部分を果しておかんと思う。

九月十九日——「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫声しげし、天地の心なお目さめぬがごとし」

同二十一日——「秋天拭うがごとし、木葉火のごとくかがやく」

十月十九日——「月明らかに林影黒し」

同二十五日——「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入りて雲の絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で野を歩み林を訪う」

同二十六日——「午後林を訪う。林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想す」

十一月四日——「天高く気澄む、夕暮に独り風吹く野に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色ようやく到り、林影ようやく遠し」

同十八日——「月を踏んで散歩す、青煙地を這い月光林に碎く」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目黄葉の中緑樹を雑ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる」

同二十二日——「夜更けぬ、戸外は林をわたる風声ものす

したい。まず自分がかの間に下すべき答は武蔵野の美。今も昔に劣らずとの一語である。昔の武蔵野は実地見てどんなに美であつたことやら、それは想像にも及ばんほどであつたに相違あるまいが、自分が今見る武蔵野の美しさはかかる誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かしているのである。自分は武蔵野の美といった、美といわんよりむしろ詩趣といいたい、そのほうが適切と思われる。

一一

そこで自分は材料不足のところから自分の日記を種にしてみたい。自分は二十九年の秋の初めから春の初めまで、渋谷村の小さな茅屋に住んでいた。自分がかの望みを起こしたのもその時のこと、また秋から冬の事のみを今書くというのもそのわけである。

九月七日——「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払いつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるととき林影一時に煌めく、——」

これが今の武蔵野の秋の初めである。林はまだ夏の緑のそのままでありながら空模様は夏とまったく変わつてきて雨雲の南風につれて武蔵野の空低くしきりに雨を送るその晴間には日の光水気を帯びてかなたの林に落ちこなたの杜にかがやく。自分はいかに美しいことだろうかと。二日置いて九日の日記にも「風強く秋声野にみつ、浮雲変幻たり」とある。ちょうどこのころ

ごし。滴声しきりなれども雨はすでに止みたりとおぼし」

同二十三日——「昨夜の風雨にて木葉ほとんど揺落せり。稲田もほとんど刈り取らる。冬枯の淋しき様となりぬ」

同二十四日——「木葉いまだまつたく落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懐し」

同二十六日——「夜十時記す「屋外は風雨の声ものすごし。滴声相應ず。今日は終日霧たちこめて野や林や永久の夢に入りたらんごとく。午後犬を伴うて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る。水流林より出でて林に入る、落葉を浮かべて流る。おりおり時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり」

同二十七日——「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うららかに昇りぬ。屋後の丘に立ちて望めば富士山真白ろに連山の上に聳ゆ。風清く気澄めり。

げに初冬の朝なるかな。

田面に水あふれ、林影倒に映れり」

十二月二日——「今朝霜、雪のごとく朝日にきらめきてみごとなり。しばらくして薄雲かかり日光寒し」

同二十二日——「雪初めて降る」

三十年一月十三日——「夜更けぬ。風死し林黙す。雪しきりに降る。燈をかかげて戸外をうかがう、降雪火影にきらめきて舞う。ああ武蔵野沈黙す。しかも耳を澄ませば遠きかなたの林をわたる風の音す、はたして風声か」

同十四日——「今朝大雪、葡萄棚墮ちぬ。

夜更けぬ。梢をわたる風の音遠く聞こゆ、ああこれ武蔵野

のは近來のことで、それも左の文章がおおいに自分を教えたのである。

「秋九月中旬というころ、一日自分が樺の林の中に座していたことがあった。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合そらあひい。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚引たなひくかと思うと、フトまたあちこち瞬またたく間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐さかし気にみえる人の眼のごとくに朗らかに晴れた蒼空あわぞらがのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上でかすかに戦そよいだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌しゃべりでもなかったが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかな私語ささやき声であった。そよ吹く風は忍ぶように木末こずえを伝つたった、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようすが間断なく移り変わった、あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑したように、隈なくあかみわたって、さのみ繁しげくもない樺かほのほそぼそとした幹みきは思いがけずも白絹めく、やさしい光沢こうたくを帯おび、地上に散り布しいた、細かな落ち葉はにわかに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしったような『ペアポロトニク』(蕨わらびの類たぐい)のみごとな茎きき、しかも熟つえすぎた葡萄ぶどうめく色いろを帯おびたのが、際限もなくもつれからみつして目前に透

の林より林をわたる冬の夜寒よふさむの凧こがらしなるかな。雪どけの滴声たつき軒のをめぐる。」
同二十日——「美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱しもむら白銀の
ごとくきらめく。小鳥梢こどりさかに囀うらず。梢頭針しやうとうしのごとし」
二月八日——「梅咲きぬ。月ようやく美なり」
三月十三日——「夜十二時、月傾き風きゆうに、雲わき、
林鳴る」
同二十一日——「夜十一時。屋外の風声をきく、たちまち
遠くたちまち近し。春や襲のいし、冬や遁のがれし」

三

昔の武蔵野は萱原かやはらのはてなき光景をもつて絶類の美を鳴らしていたようにいい伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林はじつに今の武蔵野の特色といつてもよい。すなわち木はおもに檜ひのきの類たぐいで冬はことごとく落葉らくえつし、春は滴たるばかりの新緑しんりく萌もえ出でずるその変化が秩父嶺ちちぶのね以東十数里の野いつせいに行なわれて、春夏秋冬を通じ霞かすみに雨に月に風に霧に時雨しぐれに雪に、緑蔭りくえんに紅葉こうじに、さまざまの光景を呈ていするその妙はちよつと西国地方また東北の者には解しかねるのである。元来日本人はこれまで檜ひのきの類たぐいの落葉林の美をあまり知らなかつたようである。林といえはおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも檜林の奥で時雨を聞くというようなことは見あたらな

い。自分も西国に人となつて少年の時学生として初めて東京に上つてから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至つたかして見られた。

あるいはまたあたり一面にわかに薄暗くなりだして、瞬またたく間に物のあいろも見えなくなり、樺かほの木立ちも、降り積たつたままでもたまたま日の眼に逢あわぬ雪のように、白くおぼろに霞かすみむ——と小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するようバラバラと降ふつて通とつた。樺かほの木の葉はいちじるしく光沢こうたくが褪せめてもさすがになお青かつた、がただそちこちに立つ稚木こぎのみはすべて赤くも黄いろくも色づいて、おりおり日の光りが今春雨あめに濡ぬれたばかりの細枝の繁さかみを漏もれて滑なりながらに脱ぬけてくるのをあびては、キラキラときらめいた」

すなわちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して「あいびき」と題した短編の冒頭ぼうとうにある一節であつて、自分がかかる落葉林の趣おもむきを解するに至つたのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺かほの木で、武蔵野の林は檜ひのきの木、植物帯からいとはなはだ異なつてゐるが落葉林の趣おもむは同じことである。自分はいはば思おもつた、もし武蔵野の林が檜ひのきの類たぐいでなく、松か何かであつたらきわめて平凡な変化に乏しい色彩しきさいいちようなものとなつてしまふちんちん珍重ちんじゆうするに足らないだろうと。

檜ひのきの類たぐいだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨しぐれが私語ささやく。凧こがらしが叫こぶ。一陣の風小高い丘を襲おえば、幾千万の木の高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。木の葉落ちつくせば、数十里の区域にわたる林が一時に裸体はだかになつて、蒼あおずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の

沈静に入る。空気がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴ていしし、睇視ていしし、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くということがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適かなつてゐるだろう。秋ならば林のうちより起おこる音ね、冬ならば林のかなた遠く響く音。

鳥の羽音うぶね、囀さえずる声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢くさむらの蔭かげ、林の奥にすたく虫の音こゑ。空車荷車の林を廻めぐり、坂を下り、野路のじを横よぎる響ひびき。蹄ひづめで落葉を蹴け散らす音ね、これは騎兵演習の斥候せつこうか、さなくば夫婦連れで遠乗りに出かけた外国人である。何事なにごとをか声高こゑたかに話しながらゆく村の者のだみ声こゑ、それもいつしか、遠ざかりゆく。独り淋さびしそうに道みちをいそぐ女の足音あしね。遠く響く砲声ぱうしやう。隣となの林でだしぬけに起おこる銃音じゆうおん。自分が一度犬をつれ、近処ちかところの林を訪おもい、切株きりくに腰こしをかけて書ほんを読よんでゐると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとに臥ねていた犬が耳を立ててきつとそのほうを見つめた。それぎりであつた。たぶん栗くりが落ちたのであろう、武蔵野には栗くりもずいぶん多いから。

もしそれ時雨しぐれの音に至つてはこれほど幽寂ゆうじやくのものはない。山家の時雨は我国でも和歌の題にまでなつてゐるが、広い、広い、野末から野末へと林を越え、杜もりを越え、田を横よぎり、また林を越えて、しのびやかに通り過ゆく時雨の音のいかにも幽しずかで、また鷹揚たうやうな趣おもむきがあつて、優やさしく懐ゆかしいのは、じつに武蔵野の時雨の特色であらう。自分がかつて北海道の深林で時雨に逢あつたことがある、これはまた人跡絶無の大森林であるからその趣は

さらに深いが、その代り、武蔵野の時雨のさらに人なつかしく、私語くがごとき趣はない。

秋の中ごろから冬の初め、試みに中野あたり、あるいは渋谷、世田ヶ谷、または小金井の奥の林を訪うて、しばらく座って散歩の疲れを休めてみよ。これらの物音、たちまち起こり、たちまち止み、しだいに近づき、しだいに遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちてかすかな音をし、それも止んだ時、自然の静蕭を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであろう。武蔵野の冬の夜更けて星斗闌干たる時、星をも吹き落としそうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分はしばしば日記に書いた。風の音は人の思いを遠くに誘う。自分はこのもの凄風風の音のたちまち近くたちまち遠きを聞きては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけたこともある。

熊谷直好の和歌に、

よもすから木葉かたよる音きけは

しのひに風のかよふなりけり

というがあれど、自分は山家の生活を知っていながら、この歌の心をげにもと感じたのは、じつに武蔵野の冬の村居の時であつた。

林に座つていて日の光のもつとも美しきを感じるの、春の末より夏の初めであるが、それは今ここには書くべきでない。その次は黄葉の季節である。なかば黄いろくなかば緑な林の中に歩いてみると、澄みわたつた大空が梢々の隙間からのぞかれ

向かつて壁のようにたつ林の一面はすべてざわざわつき、細末の玉の屑を散らしたように煌きはしないがちらついていた。また枯れ草、莠、藁の嫌いなくそこら一面にからみついた蜘蛛の巣は風に吹き靡かされて波たつていた。

自分はたちどまつた……心細くなつてきた、眼に遮る物象はサツパリとはしていれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじさが見透かされるように思われて。小さな鴉が重そうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首を回らして、横目で自分をにらめて、きゆうに飛び上がつて、声をちぎるように啼きわたりながら、林の向うへかくれてしまった。鳩が幾羽ともなく群をなして勢いこんで穀倉のほうから飛んできた、がフト柱を建てたように舞い昇つて、さてパツといつせいに野面に散つた——ア秋だ！誰だか禿山の向うを通るとみえて、から車の音が虚空に響きわたつた……」

これはロシアの野であるが、我武蔵野の野の秋から冬へかけの光景も、およそこんなものである。武蔵野にはけつして禿山はない。しかし大洋のうねりのように高低起伏している。それも外見には一面の平原のようで、むしろ高台のところどころが低く窪んで小さな浅い谷をなしているといったほうが適當であろう。この谷の底はたいがい水田である。畑はおもに高台にある、高台は林と畑とでさまざまの区劃をなしている。畑はすなわち野である。されば林とても数里にわたるものなく否、お

て日の光は風に動く葉末葉末に碎け、その美しきいつくされず。日光とか碓氷とか、天下の名所はともかく、武蔵野のような広い平原の林が隈なく染まつて、日の西に傾くとともに一面の火花を放つというも特異の美観ではあるまいか。もし高きに登りて一目にこの大観を占めることができるならこの上もないこと、よしそれができがたいにせよ、平原の景の単調なるだけに、人をしてその一部を見て全部の広い、ほとんど限りない光景を想像させるものである。その想像に動かされつつ夕照に向かつて黄葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなにおもしろからう。林が尽きると野に出る。

四

十月二十五日の記に、野を歩み林を訪うと書き、また十一日四日の記には、夕暮に独り風吹く野に立てばと書いてある。そこで自分は今一度ツルゲーネフを引く。

「自分はたちどまつた、花束を拾い上げた、そして林を去つてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂つて、射す影も蒼ざめて冷やかになり、照るとはなくなつただジミな水色のぼかしを見るように四方に充ちわたつた。日没にはまだ半時間もあるうに、モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄いろくからびた刈株をわたつて烈しく吹きつける野分に催されて、そりかえつた細かな落ち葉があわただしく起き上がり、林に沿うた往来を横ぎつて、自分の側を駆け通つた、のらに

そらく一里にわたるものもあるまい、畑とても一眸数里に続くものはなく一座の林の周囲は畑、一頃の畑の三方は林、というような具合で、農家がその間に散在してさらにこれを分割している。すなわち野やら林やら、ただ乱雑に入組んでいて、たちまち林に入るかと思えば、たちまち野に出るというような風である。それがまたじつに武蔵野に一種の特色を与えていて、ここに自然あり、ここに生活あり、北海道のような自然そのままの大原野大森林とは異なつていて、その趣も特異である。

稲の熟するころとなると、谷々の水田が黄ばんでくる。稲が刈り取られて林の影が倒さに田面に映るころとなると、大根畑の盛りで、大根がそろそろ抜かれて、あちらこちらの水溜めまたは小さな流れのほとりで洗われるようになると、野は麦の新芽で青々となつてくる。あるいは麦畑の一端、野原のままで残り、尾花野菊が風に吹かれていた。萱原の一端がしだいに高まつて、そのはてが天ぎわをかぎつていて、そこへ爪先あがりに登つてみると、林の絶え間を国境に連なる秩父の諸嶺が黒く横たわつていて、あたかも地平線上を走つてはまた地平線下に没しているようにもみえる。さてこれよりまた畑のほうへ下るべきか。あるいは畑のかなたの萱原に身を横たえ、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避けながら、南の空をめぐる日の微温き光に顔をさらして畑の横の林が風にざわつき輝くのを眺むべきか。あるいはまたただちにかの林へとゆく路をすすむべきか。自分はかくためらつたことがしばしばある。自分は困つたか否、けつして困らない。自分は武蔵野を縦横に通じている路は、どれを撰んでいつでも自分を失望させないことを久しく

経験して知っているから。

五

自分の朋友がかつてその郷里から寄せた手紙の中に「この間も一人夕方に萱原を歩みて考え申候、この野の中に縦横に通ぜる十数の径の上を何百年の昔よりこのかた朝の露さやけしといては出で夕の雲花やかなりといてはあこがれ何百人のあわれ知る人や逍遙しつらん相悪む人は相避けて異なる道をへだたりていき相愛する人は相合して同じ道を手に手とりつつかえりつらん」との一節があつた。野原の径を歩みてはかかるいみじき想いも起こるならんが、武蔵野の路はこれとは異り、相逢わんとて往くとも逢いそこね、相避けんとして歩むも林の回り角で突然出逢うことがある。されば路という路、右にめぐり左に転じ、林を貫き、野を横ぎり、真直なること鉄道線路のごときかと思えば、東よりすすみてまた東にかえるような迂回の路もあり、林にかくれ、谷にかくれ、野に現われ、また林にかくれ、野原の路のようによく遠くの別路ゆく人影を見ることは容易でない。しかし野原の径の想いにもまして、武蔵野の路にはいみじき実がある。

武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない。どの路でも足の向くほうへゆけばかならずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はただその縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことによつて始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、

原と林との間に隠れていたのを発見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の断片を鮮かに映している。水のほとりには枯蘆がすこしばかり生えている。この池のほとりの径をしばらくゆくとまた二つに分かれる。右にゆけば林、左にゆけば坂。君はかならず坂をのぼるだろう。とかく武蔵野を散歩するのは高い処高い処と撰びたくなるのはなんとかして広い眺望を求むるからで、それでその望みは容易に達せられない。見下ろすような眺望はけつしてできない。それは初めからあきらめたがいい。

もし君、何かの必要で道を尋ねたく思わば、畑の真中にいる農夫にききたまえ。農夫が四十以上の人であつたら、大声をあげて尋ねてみたまえ、驚いてこちらを向き、大声で教えてくれるだろう。もし少女であつたら近づいて小声でききたまえ。もし若者であつたら、帽を取つて慇懃に問いたまえ。鷹揚に教えてくれるだろう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

教えられた道をゆくと、道がまた二つに分かれる。教えてくれたほうの道はあまりに小さくてすこし変だと思つてもそのとおりにゆきたまえ、突然農家の庭先に出るだろう。はたして変だと驚いてはいけぬ。その時農家で尋ねてみたまえ、門を出るとすぐ往来ですよと、すげなく答えるだろう。農家の門を外に出てみるとはたして見覚えある往来、なるほどこれが近路だなど君は思はず微笑をもらす、その時初めて教えてくれた道のありがたさが解るだろう。

真直な路で両側とも十分に黄葉した林が四五丁も続く処に出ることがある。この路を独り静かに歩むことのどんなに楽しか

雨にも、時雨にも、ただこの路をぶらぶら歩いて思いつきしだいに右し左すれば随処に吾らを満足させるものがある。これがじつにまた、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じている。武蔵野を除いて日本にこのような処がどこにあるか。北海道の原野にはむろんのこと、奈須野にもない、そのほかどこにあるか。林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのように密接している処がどこにあるか。じつに武蔵野にかかる特殊の路のあるのはこのゆえである。

されば君もし、一の小径を往き、たちまち三条に分かるる処に出たなら困るに及ばない、君の杖を立ててその倒れたほうに往きたまえ。あるいはその路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つてまた二つに分かれたら、その小なる路を撰んでみたまえ。あるいはその路が君を妙な処に導く。これは林の奥の古い墓地で苔むす墓が四つ五つ並んでその前にすこしばかりの空地があつて、その横のほうに女郎花など咲いていることもある。頭の上の梢で小鳥が鳴いていたら君の幸福である。すぐ引きかえして左の路を進んでみたまえ。たちまち林が尽きて君の前に見わたしの広い野が開ける。足元からすこし下なら下がりになり萱が一面に生え、尾花の末が日に光っている、萱原の先きが畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集まつていて雲の色にまがいそうな連山がその間にすこしずつ見える。十月小春の日の光のどかに照り、小気味よい風がそよそよと吹く。もし萱原のほうへ下りてゆくと、今まで見えた広い景色がごとごとく隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだろう。思いがけなく細長い池が萱

らう。右側の林の頂は夕照鮮かにかがやいている。おりおり落葉の音が聞こえるばかり、あたりはしんとしていかに淋しい。前にも後ろにも人影見えず、誰にも遇わず。もしそれが木葉落ちつくしたころならば、路は落葉に埋れて、一足ごとにかさがさと音がする、林は奥まで見すかされ、梢の先は針のごとく細く蒼空を指している。なおさら人に遇わない。いよいよ淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩あわただしく飛び去る羽音に驚かされるばかり。

同じ路を引きかえして帰るは愚である。迷つたところが今の武蔵野にすぎない、まさかに行暮れて困ることもあるまい。帰りもやはりおよその方角をきめて、べつな路を当てもなく歩くが妙。そうすると思わず落日の美観をうることもある。日は富士の背に落ちんとしていまだまつたく落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るがうちにさまさまの形に変わる。連山の頂は白銀の鎖のような雪がしだいに遠く北に走つて、終は暗憺たる雲のうちに没してしまふ。

日が落ちる、野は風が強く吹く、林は鳴る、武蔵野は暮れんとする、寒さが身に沁む、その時は路をいそぎたまえ、顧みて思わず新月が枯木の梢の横に寒い光を放っているのを見る。風が今にも梢から月を吹き落としそうである。突然また野に出る。君はその時、

山は暮れ野は黄昏の薄かな

の名句を思いだすだろう。

今より三年前の夏のことであった。自分はある友と市中の寓居を出でて三崎町の停車場から境まで乗り、そこで下りて北へ真直に四五丁ゆくと桜橋という小さな橋がある、それを渡るると一軒の掛茶屋がある、この茶屋の婆さんが自分に向かつて、「今時分、何にしに来ただア」と問うたことがあった。

自分は友と顔見あわせて笑って、「散歩に来たのよ、ただ遊びに来たのだ」と答えると、婆さんも笑って、それもばかにしたような笑いかたで、「桜は春咲くこと知らねえだね」といった。そこで自分は夏の郊外の散歩のどんなにおもしろいかを婆さんの耳にも解るように話してみたがむだであった。東京の人はのんきだという一語で消されてしまった。自分らは汗をふきふき、婆さんが剥いてくれる甜瓜を喰い、茶屋の横を流れる幅一尺ばかりの小さな溝で顔を洗いなどして、そこを立ち出でた。この溝の水はたぶん、小金井の水道から引いたものらしく、よく澄んでいて、青草の間を、さも心地よさそうに流れて、おりおりこぼこぼと鳴っては小鳥が来て翼をひたし、喉を湿おすのを待っているらしい。しかし婆さんは何とも思わないでこの水で朝夕、鍋釜を洗うようであった。

茶屋を出て、自分らは、そろそろ小金井の堤を、水上のほうへとのぼり初めた。ああその日の散歩がどんなに楽しかったろう。なるほど小金井は桜の名所、それで夏の盛りにその堤をのこのこ歩くもよそ目には愚かにみえるだろう、しかしそれはい

消え、間近くなるにつれてぎらぎら輝いて矢のごとく走っていく。自分たちはある橋の上に立って、流れの上と流れのすそと見比べていた。光線の具合で流れの趣が絶えず変化している。水上が突然薄暗くなるかとみると、雲の影が流れとともに、瞬間に走ってきて自分たちの上まで来て、ふと止まって、きゅうに横にそれてしまうことがある。しばらくすると水上がまばゆく煌いてきて、両側の林、堤上の桜、あたかも雨後の春草のように鮮かに緑の光を放ってくる。橋の下では何ともいいようなない優しい水音がする。これは水が両岸に激して発するのでもなく、また浅瀬のような音でもない。たつぷりと水量があるので、水と水とがもつれてからまつて、揉みあつて、みずから音を発するのである。何たる人なつかしい音だろう！

“—— Let us match

This water's pleasant tune

With some old Border song, or catch,

That suits a summer's noon.”

の句も思いだされて、七十二歳の翁と少年とが、そこら桜の木蔭にでも坐っていないだろうかと見廻わしたくなる。自分はこの流れの両側に散点する農家の者を幸福の人々と思つた。むろん、この堤の上を麦藁帽子とステッキ一本で散歩する自分たちをも。

まだ今の武蔵野の夏の日の光を知らぬ人の話である。

空は蒸暑い雲が湧きいでて、雲の奥に雲が隠れ、雲と雲との間の底に蒼空が現われ、雲の蒼空に接する処は白銀の色とも雪の色とも譬えがたき純白な透明な、それで何となく穏やかな淡々しい色を帯びている、そこで蒼空が一段と奥深く青々と見える。ただこれぎりなら夏らしくもないが、さて一種の濁つた色の霞のようなものが、雲と雲との間をかき乱して、すべての空の模様を動揺、参差、任放、錯雑のありさまとなし、雲を劈く光線と雲より放つ陰翳とが彼方此方に交叉して、不羈奔逸の気がいずこともなく空中に微動している。林という林、梢という梢、草葉の末に至るまでが、光と熱とに溶けて、まじろんで、怠けて、うつらうつらとして酔っている。林の一角、直線に断たれてその間から広い野が見える、野良一面、糸遊上騰して永くは見つめていられない。

自分らは汗をふきながら、大空を仰いだり、林の奥をのぞいたり、天ぎわの空、林に接するあたりを眺めたりして堤の上を喘ぎ喘ぎ辿つてゆく。苦しいか？ どうして！ 身うちには健康がみちあふれている。

長堤三里の間、ほとんど人影を見ない。農家の庭先、あるいは藪の間から突然、犬が現われて、自分らを怪しそうに見て、そしてあくびをして隠れてしまう。林のかなたでは高く羽ばたきをして雄鶏が時をつくる、それが米倉の壁や杉の森や林や藪に籠つて、ほがらかに聞こえる。堤の上にも家鶏の群が幾組となく桜の陰などに遊んでいる。水上を遠く眺めると、一直線に流れてくる水道の末は銀粉を撒いたような一種の陰影のうちに

自分といつしよに小金井の堤を散歩した朋友は、今は判官になつて地方に行つてゐるが、自分の前号の文を読んで次のごとくに書いて送つてきた。自分は便利のためにこれをここに引用する必要を感じずる——武蔵野は俗にいう関八州の平野でもない。また道灌が傘の代りに山吹の花を貰つたという歴史的原でもない。僕は自分で限界を定めた一種の武蔵野を有している。その限界はあたかも国境または村境が山や河や、あるいは古跡や、いろいろのもので、定めらるるようにおのずから定められたもので、その定めは次のいろいろの考えから来る。

僕の武蔵野の範囲の中には東京がある。しかしこれはむろん省かなくてはならぬ、なぜならば我々は農商務省の官衙が巍峨として聳えていたり、鉄管事件の裁判があつたりする八百八街によつて昔の面影を想像することができない。それに僕が近くろ知合いになつたドイツ婦人の評に、東京は「新しい都」ということがあつて、今日の光景ではたとえ徳川の江戸であつたにしろ、この評語を適当と考えられる筋もある。このようなわけで東京はかならず武蔵野から抹殺せねばならぬ。

しかしその市の尽くる処、すなわち町外ずればかならず抹殺してはならぬ。僕が考えには武蔵野の詩趣を描くにはかならずこの町外れを一の題目とせねばならぬと思う。たとえば君が住まわれた渋谷の道玄坂の近傍、目黒の行人坂、また君と僕と散歩したこと多い早稲田の鬼子母神あたりの町、新宿、白金……

また武蔵野の味を知るにはその野から富士山、秩父山脈、国府台等を眺めた考えのみでなく、またその中央に包まれている首府東京をふり顧つた考えで眺めねばならぬ。そこで三里五里の外に出で平原を描くことの必要がある。君の一篇にも生活と自然とが密接しているということがあり、また時々いろいろなものに出あうおもしろい味が描いてあるが、いかにもさよふうだ。僕はかつてこういうことがある、家弟をつれて多摩川のほうへ遠足したときに、一二里行き、また半里行きて家並があり、また家並に離れ、また家並に出て、人や動物に接し、また草木ばかりになる、この変化のあるのでところどころに生活を点綴している趣味のおもしろいことを感じて話したことがあつた。この趣味を描くために武蔵野に散在せる駅、駅といかぬまでも家並、すなわち製図家の熟語でいう聯檐家屋を描写するの必要がある。

と我々は関八州の一隅に武蔵野が呼吸している意味を感じる。しかし東京の南北にかけては武蔵野の領分がはなはだせまるところで、かつ鉄道が通じているので、すなわち「東京」がこの線路によって武蔵野を貫いて直接に他の範囲と接続しているからである。僕はどうもそう感じる。

そこで僕は武蔵野はまず雑司谷から起こつて線を引いてみると、それから板橋の中仙道の西側を通つて川越近傍まで達し、君の一篇に示された入間郡を包んで円く甲武線の立川駅に来る。この範囲の間に所沢、田無などという駅がどんなに趣味が多いか……ことに夏の緑の深いころは。さて立川からは多摩川を限界として上丸辺まで下る。八王子はけつして武蔵野には入れられない。そして丸子から下目黒に返る。この範囲の間に布田、登戸、二子などのどんなに趣味が多いか。以上は西半面。

東の半面は亀井戸辺より小松川へかけ木下川から堀切を包んで千住近傍へ到つて止まる。この範囲は異論があれば取除いてもよい。しかし一種の趣味があつて武蔵野に相違ないことは前に申したとおりである――

八

また東のほうの平面を考えられよ。これはあまりに開けて水田が多くて地平線がすこし低いゆえ、除外せられそうなれどやはり武蔵野に相違ない。亀井戸の金糸堀のあたりから木下川辺へかけて、水田と立木と茅屋とが趣をなしているぐあいは武蔵野の一領分である。ことに富士でわかる。富士を高く見せてあだかも我々が逗子の「あぶずり」で眺むるように見せるのはこの辺にかぎる。また筑波でわかる。筑波の影が低く遙かなるを見る

自分は以上の所説にすこしの異存もない。ことに東京市の町外れを題目とせよとの注意はすこぶる同意であつて、自分もかねて思いついていたことである。町外れを「武蔵野」の一部に入れるといえ、すこしおかしく聞こえるが、じつは不思議

議はないので、海を描くに波打ちぎわを描くも同じことである。しかし自分はこれを後廻わしにして、小金井堤上の散歩に引きつづき、まず今の武蔵野の水流を説くことにした。

第一は多摩川、第二は隅田川、むろんこの二流のことは十分に書いてみたいが、さてこれも後廻わしにして、さらに武蔵野を流るる水流を求めてみたい。

小金井の流れのごとき、その一である。この流れは東京近郊に及んでは千駄ヶ谷、代々木、角筈などの諸村の間を流れて新宿に入り四谷上水となる。また井頭池、善福池などより流れ出でて神田上水となるもの。目黒辺を流れて品海に入るもの。渋谷谷辺を流れて金杉に出ずるもの。その他名も知れぬ細流小溝に至るまで、もしこれをよそで見れば格別の妙もなければ、これが今の武蔵野の平地高台の嫌いなく、林をくぐり、野を横切り、隠れつ現われつして、しかも曲りくねつて（小金井は取除け）流るる趣は春夏秋冬に通じて吾らの心を惹くに足るものがある。自分のもと山多き地方に生長したので、河といえ、いぶん大きな河でもその水は透明であるのを見慣れたせい、初めは武蔵野の流れ、多摩川を除いては、ことごとく濁っているのではなはだ不快な感を惹いたものであるが、だんだん慣れてみると、やはりこのすこし濁つた流れが平原の景色に適つてみえるように思われてきた。

自分が一度、今より四五年前の夏の夜の事であつた、かの友と相携えて近郊を散歩したことを憶えている。神田上水の上流の橋の一つを、夜の八時ごろ通りかかつた。この夜は月冴えて風清く、野も林も白紗につつまれしようにて、何ともいいがた

き良夜であつた。かの橋の上には村のもの四五人集まつていて、欄に倚つて何事かを語り何事かを笑い、何事かを歌つていた。その中に一人の老翁がまぎつていて、しきりに若い者の話や歌をまぜツかえしていた。月はさやかに照り、これらの光景を朦朧たる楕円形のうちに描きだして、田園詩の一節のように浮かべている。自分たちもこの画の中の人に加わつて欄に倚つて月を眺めていると、月は緩やかに流るる水面に澄んで映つてゐる。羽虫が水を搏つごとに細紋起きてしばらく月の面に小皺がよるばかり。流れは林の間をくねつて出てきたり、また林の間に半円を描いて隠れてしまう。林の梢に砕けた月の光が薄暗い水に落ちてきらめいて見える。水蒸気は流れの上、四五尺の処をかすめている。

大根の時節に、近郊を散歩すると、これらの細流のほとり、いたるところで、農夫が大根の土を洗っているのを見る。

九

かならずしも道玄坂といわず、また白金といわず、つまり東京市街の一端、あるいは甲州街道となり、あるいは青梅道となり、あるいは中原道となり、あるいは世田ヶ谷街道となり、郊外の林地田圃に突入する処の、市街ともつかず宿駅ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈しおる場処を描写することが、すこぶる自分の詩興を喚び起こすも妙ではないか。なぜかような場処が我らの感を惹くだらうか。自分は一言にして答えることができる。すなわちこのような

町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見
るような思いをなさしむるからであろう。言葉を換えていえば、
田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小
さな物語、しかも哀れの深い物語、あるいは抱腹するような物
語が二つ三つそこらの軒先に隠れていそうに思われるからであ
ろう。さらにその特点をいえば、大都会の生活の名残と田舎の
生活の余波とがここで落ちあつて、緩やかにうずを巻いている
ようにも思われる。

見たまえ、そこに片眼の犬が蹲っている。この犬の名の通っ
ているかぎりがすなわちこの町外れの領分である。

見たまえ、そこに小さな料理屋がある。泣くのとも笑うのとも
分からぬ声を振立ててわめく女の影法師が障子に映っている。
外は夕闇がこめて、煙の臭いとも土の臭いともわかちがたき香
りが淀んでいる。大八車が二台三台と続いて通る、その空車の轆
の響が喧しく起こりては絶え、絶えては起こりしている。

見たまえ、鍛冶工の前に二頭の駄馬が立っているその黒い影
の横のほうで二三人の男が何事をかひそひそと話しあっている
のを。鉄蹄の真赤になったのが鉄砧の上に置かれ、火花が夕闇
を破つて往来の中ほどまで飛んだ。話していた人々がどつと何
事をか笑つた。月が家並の後ろの高い檜の梢まで昇ると、向う
片側の家根が白ろんできた。

かんでらから黒い油煙が立っている、その間を村の者町の者
十数人駈け廻わつてわめいている。いろいろの野菜が彼方此方
に積んで並べてある。これが小さな野菜市、小さな糶売場であ
る。

大火に襲われ、市内の重要な建物だった東照宮、喜多院などが焼失した。
当時の東照宮は三大東照宮の一つに数えられていたので、徳川幕府はその
の再建のため、江戸城にあった紅葉山御殿を分解し、用材を川越に移築
することにしたが、その運搬には新河岸川による水路が使われた。この
とき始まった舟運によって、川越からは農産物が江戸に送られ、その後
舟運は整備され、川越と江戸との物資交流の大動脈となった。

江戸と川越との物資輸送のため中継点が必要になり、現在の志木市の、
柳瀬川と新河岸川が合流する地点に船着場が設けられた。当時この辺り
は引又といわれ、その河岸（引又河岸）に、川越藩主の命令によって、「井
下田回漕店」が開業した。井下田家に残された資料によると、荷主の分
布は、新座、清瀬、所沢、小平、国分寺、武蔵村山、立川を越え、秋川、
青梅、八王子にまで達していた。

船着場で荷揚げされた荷物を運搬する人々は、だから坂を上つてゆ
き、河岸場から運ばれた荷物を、この通りで取引した。そのため市場通
りは商いで繁盛した。

もう一つ、引又宿には欠かせないものがあつた。それはこの大通りの
中央を流れる「伊豆殿堀」（野火止用水）だ。承応四年（1655）、川
越城主松平伊豆守信綱が、自領であつた「野火止」の原野を開拓するため、
灌漑用水として掘削したものであつた。この堀は、現在の志木市の本町
通りを貫通し、新河岸川に流れ込んでいたが、寛文二年（1662）、引
又の対岸、宗岡地域の地頭岡部左兵衛は、新河岸川を越えて送水し、灌
漑用水に利用しようと考えた。そのため家臣の白井武左衛門に命じて巨
大な架け樋を造らせた。

この架け樋は四十八個の木の樋をつないで造られていたことに因んで
「いろは樋」と名付けられ、長さは260メートルにも及んだ。しかも

日が暮れるとすぐ寝てしまう家があるかと思うと夜の二時ごろ
まで店の障子に火影を映している家がある。理髪所の裏が
百姓家で、牛のうなる声が往来まで聞こえる、酒屋の隣家が
納豆売の老爺の住家で、毎朝早く納豆納豆と囁声で呼んで都の
ほうへ向かつて出かける。夏の短夜が間もなく明けると、もう
荷車が通りはじめる。ごろごろがたがた絶え間がない。九時十
時となると、蟬が往来から見える高い梢で鳴きだす、だんだん
暑くなる。砂埃が馬の蹄、車の轍に煽られて虚空に舞い上がる。
蠅の群が往来を横ぎつて家から家、馬から馬へ飛んであるく。
それでも十二時のどんがかすかに聞こえて、どことなく都の
空のかなたで汽笛の響がする。

武蔵野台地の果つるところ・・・のはら博武

エッセイ のはら博武

台地の東端、かつての「引又宿」

東武東上線の「志木駅」東口を降り、歩いて約15分、本町一、二丁目
の大通りは、江戸時代から新河岸川の舟運によって賑わっていた。明治
初年まで、甲州街道と日光街道とを結ぶバイパスだった「奥州道」の宿
場で、「引又宿」と呼ばれていた。

江戸時代、寛永のころ、埼玉県西部の中心都市「川越」は、江戸城北
方の重要な防衛拠点だった。江戸と深い関係をもった多くの史蹟が残る
川越は、いまも「小江戸」といわれているが、寛永十五年（1638）、

舟の通行を妨げぬよう川面から4〜5メートルも高いところに架けられ
た。

また引又宿は、宿場として、人馬継ぎ立て業務をも行なっていた。江
戸時代の紀行文にも、軒を連ねた商家、定期的に開かれた市の有様が生
き生きと描かれている。市場通りには、穀物商などの商家、大店が並び、
両側に柿と梨を植えた用水が通りの中央を流れていた。裕福な商人の社
交の場所であつた酒樓や旅籠の賑わいも伝わってくる。

大正三年、東武鉄道東上線が開通し、舟運に取って代わるまで、この
繁栄は昭和の時代、戦前まで続いた。

新河岸川に沿って開けた「引又宿」（いまの志木市本町通り）につい
て書かれた二つの紀行文を読んでみよう。

『遊歴雑記』 釈敬順（注1）

文化年間

新座郡引又宿

・・・（前略）・・・されば引股の宿ハ、南北の町長さ三町余、新宿、本宿、
中宿、坂下町と次第して町幅広く穀問屋あり、酒樓、食店、商家、旅籠
屋両側に軒をつらね、片鄙には都会の土地にして、例月三、八の日市の
たつ事となん、又又当処新宿の入口より、町の真中に大樋を堀埋め、幅
三尺余、深さ四五尺、新宿の方は高く、坂下の方ハ次第に低けれバ、清
流迸り来り実にいさぎよし、此大樋の側にいたりて、市中の男女よろづ
のものをあらひすすぎ飲水とす、元来此土地高みなれば水に乏しき場処
なるに、斯潤沢に清流に富事ハ、全く伊豆守三代目松平信綱が高智のい
たす処にして、万宝の最上といふべし、此埋樋の両側に、柿と梨との二
樹を植る事凡長さ式町、頃は九月九日なれば梨柿ともに見事に熟し、重
たげに樹たハミ、枝垂て、人の手おのおの届くといへども、児童だに狼

籍せざるハ一品にして、土地に沢山なる故ならんかし。・・・(後略)・・・

『一日二日の旅』東京の近郊 田山花袋(注2)

大正九年六月十五日

・・・(前略) 野火止の街道の右側では、例の溝渠に添って、農婦が頻りに物を洗つてゐるのを私達は見た。やがて少し行ったところから、四角を右に折れて、私達は志木の停車場のある方へと行った。

停車場近くに来た時には、もう灯が明るく夕暮の空気の中に見えてゐた。路の傍には、綺麗な水の一杯に満ちたその溝渠が流れてゐて、ある処では盛に水車が動いていたりした。そして、その溝渠と一緒に、私達はさびしい、しかし静かな昔の引又の里へと入って行った。

その溝渠を中央に持ったその町は風情に富んだ町であった。大きな穀屋だの、運漕店だの、呉服店だのが軒を並べてゐた。河港らしい感じがそことなくあたりに漲つてゐた。私達はそこの中ほどにある一旅館のひろい一間に一夜をすごした。

此町は武蔵野の中でも最も古い名高い町であった。此処は往昔の奥州街道になつてゐる義経などもここを通つて行つたと言ひ伝へられてあつた。それは所沢からわかれて来て此処から荒川を渡つて、河口から、岩槻の方へと出て行つた。

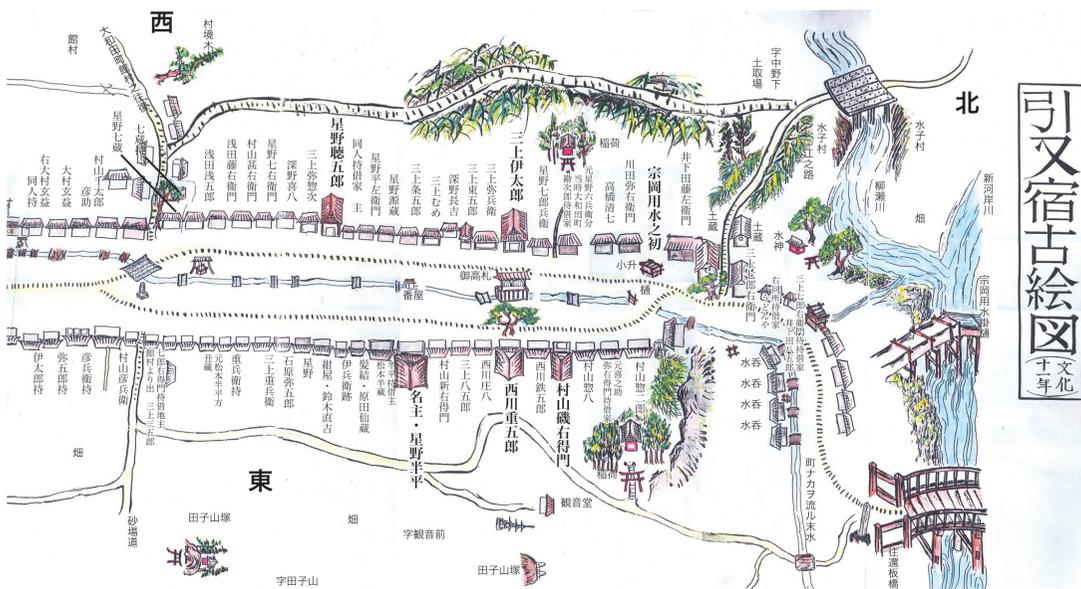
あくる朝早く、私は町を歩いて見た。その溝渠の岸には桜が栽ゑてあつて、その下では町の人達が物などを洗つてゐた。そして、この溝渠は、昔はいろは樋で内川(注3)を越して向ふに行くやうになつてゐたのが、今は、町の外れで大きな鉄管になつて、川の底を越えて、向ふに行つてゐるのを私は見た。

だからだと坂を下りると、町はやがて尽きて、向ふには風情のある橋

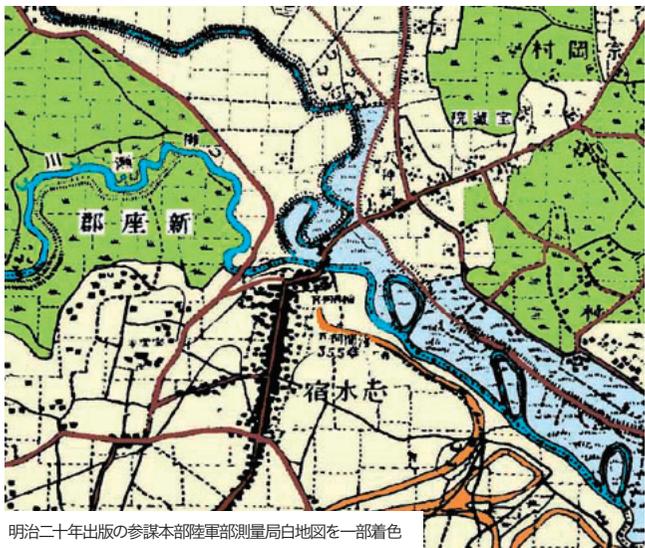


「江戸名所図会」に描かれた引又(河岸)

国立公文書館内閣文庫所蔵の原画を修飾 (手前は栄橋、その上は「いろは樋」)



引又宿古絵図 文化十年



明治二十年出版の参謀本部陸軍部測量局白地図を一部着色

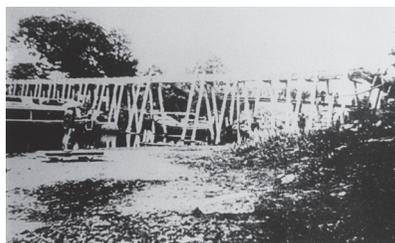
がかかつてゐた。川の岸には青々とした荻荻が茂つて、荒川を上つて、更に此処まで入つて来た伝馬が帆を畳んだまま二三隻其処にかかつてゐた。成ほど此処は武蔵野の河港であるのであつた。(後略)

(注1) 釈敬順・・・江戸を中心として各地の名所旧跡を踏査し、全五巻の「遊歴雜記」を完成させた。この著作は近世紀行文中の白眉とされる。

(注2) 田山花袋・・・明治・大正時代の自然主義派の作家。「蒲団」や「田舎教師」などの作品がある。國木田獨歩と親交があり、獨歩は「余の親友なり。而して最も力となる人なり。渠と余とは全く性格を異にし、作品の傾向を異にす。而して尚ほ十年遂に親交を断たざるは何ぞや。他なし、互いに他を尊重すればなり」と述べている。

(注3) 内川・・・後の「新河岸川」。荒川の内側を流れるところから、名付けられたという。その後江戸との舟運のため、川越に河岸場がつくられ、新規の河岸から流れてくる川という名称(新河岸川)が、もとの「内川」に取つて代わつた。

明治三十年頃の「いろは樋」



市場通りにお店を構えて百年余りの「朝日屋原薬局」(建物は現存・「國登録有形文化財」) 右は大正期、左の写真は昭和初期



明治三十六年、「いろは樋」は鉄管になって新河岸川の底を越えた。川の向岸に遺された大樹と鉄管



野火止用水が暗渠になる前の市場通り (戦後間もなく撮影:新井康一)